

奄美語喜界島方言にあらわれるシアリ融合形の用法おぼえがき

(奄美喜界島方言の時間表現から 再説—アリ・リ系のかたちをめぐって)

2015. 4. 26 第41回中日理論言語学研究会

喜界島郷土研究会 まつもと ひろたけ

1. はじめに

奄美諸語（大島語、国頭語）の時間表現は、過去テンスに関して古代語シタリ系の語形があらわれる点で、標準語や本土諸方言とかわらない。もっとも、シテにあたる連用中止形（以下シテ形といっておく）も過去テンスをさししめず語形のメンバーにくわわるところは本土とちがうようだが、むかしの女学生ことばにアノ ゴ本 オヨミニ ナッテ？のような過去テンスのたずね文があったようだから、これも部分的にはかさなる現象である。ちなみに、奄美諸語ではシテ過去形をたずね文だけでなく、のべたて文にもおおいにつかっている。

奄美諸語のシテ形が、時間表現にかかわるこのような終止的な用法へと特化しているわけではない。連用形本来の非終止的な用法をおおしくふたつにわけると、そのひとつは中止的な用法である。これはあわせ文で先行節の述語になったり、ふたまた述語をつくるさい先行述語になったりする。もうひとつはおなじ連用形だが、シテイル、シテクル、シテクレル…のように分析的なかたちとして、ひろげられた動詞活用体系のカテゴリーのメンバーになるばあいである。このラインをさらにのぼすと、シテ ホシイとかシテ（モ） イイ、シテハ イケナイのように、動詞の語形というより、あわせ述語の主要部となる連用形があるだろう。これも分析的なかたちのなかにくわえておく。そうすると、動詞の語形ということと連想させる分析的なかたちといういいかたはまずいので、今後は分析的なくみたとよんでおく。

これから検討する奄美語喜界島方言の一部にみられるテ・タリ系とはいえないかたちも、その意味・用法は時間表現にとどまるものではなく、そこからはみだしているとみられるばあいがある。以下ではそれらもひろっていく。

なお、喜界島方言の一部とは、喜界島の30あまりのシマ（集落）のうち（現在は無住のシマもある）、これまでに確認できた上嘉鉄ハティトゥと川嶺ハンミである。他に浦原ウラバルでもおなじかたちがきかれるということである。

小論では方言動詞の内容面を、つまり形態論的なカテゴリーの体系を記述することが目的でなく、内容面においてシテ・シタリ形に対応しながら、表現面において、シテ・シタリ系でない語形の紹介をめざしているため、とりあげた語形を動詞の形態論的なカテゴリーにどのように位置づけるかに関しては、あまりほりさげていない。

アリ融合形に関しては、喜界島ではじめ上嘉鉄方言でその存在に気づき、つぎに川嶺方言でも確認したので、以下その順に実例をあげていく。

2 上嘉鉄方言の終止的な用法

上嘉鉄方言では～エンでおわるかたちは、他方言にもみられるタリ系の終止形と共存しながら、この

方言の過去テンスをになう終止形のひとつになっている。

- ・ワンヌ ホーエンドー／ホータンドー． わたしが かったよ．
- ・ワンヌ ヤギー ナエンドー／ナダンドー． わたしが やぎを つないだよ．
- ・セー ヌメン ヤーカチ ムドゥレンドー／ムドゥタンドー． さけを のんで いえへ もどったよ．
- ・アリム ガバ ヌメンドー／ヌダンドー． かれも たくさん のんだよ．
- ・ワンヌ ジッタ ナゲンドー／ナギタンドー． わたしが まりを なげだよ．
- ・ティガミ カチエーン ポストエ イリエンドー／イリタンドー． てがみを かいて ポストに 入れたよ．
- ・キユ ヌー センヨ． きのう なにを したか．

～エン形とタ系のかたちの内容面でのちがいは、上嘉鉄ではまだききだせないでいる。いまのところ、(ふつうに) タ系で終止するところは、～エン形でもいえるということのようにみえる。だとすれば、ふたつは自由変異的な関係にある。

3. 中止的な用法

中止的な用法にも～エン形がでてくる。他の奄美諸方言語ならそれぞれヌディン、カチン、ウィーティン（奄美大島）などとなる場所である。

- ・セー ヌメン ヤーカチ ムドゥレンドー． さけを のんで いえへ かえったよ．
- ・ティガミ カチエーン ポストニ イリエンドー． てがみを かいて ポストに 入れたよ．
- ・ロクジニ ウィーエン ットゥラ アライエンドー． 六時に おきて かおを あらったよ．

中止的な～エン形はテ、タリ系語形の譲歩連用形シテモにあたる場所にもあらわれるなど、非終止的な形式としても用法が安定している。この方言の連用形（のひとつ）とみとめざるをえない。つぎのヌメンムは奄美諸語だとヌディンである。

- ・ウン セーヤ ヌメンム マサ ネン． その さけは のんでも うまくない．

つぎの例でナレンでなくナレーなるのは連体形＋ムン ナレーで原因・理由をしめす分析的なかたちとなっていて、ふつうの中止連用形とはいえないことと関係があるか。

- ・ニモトゥヌ ウブッサ ムン ナレー タァリェー ムチェージャンドー． にもつが おもかったので ふたりで もったよ．
- ・ウマーヤ ウミヤ チカサン ムン ナレー イューヌ マァサ ウシラン． ここは うみが ちかいので さかなが とても うまい．

ナレンとナレーをくらべると、ナレーの出発点にあたるかたちに、一定の接辞＝語尾のついたかたちからさまがわりしたものとかがえられる。だとすれば、あとでのべるように、分析的な用法のなかんでくるうえのナレーが本来の連用形で、ナレンにあたる～エン連用形は、本来終止形だったものが、連用形へもわりこんできたのではないかとかがえられる。なお、～エン形のンにあたる形式は、琉球諸語の終止形として、具体的には **-mu**, **-m**, **-N** のようなかたちとなって、よくみられるものである。

4. 分析的なくみたて

シテ クル、シテ イク、シテ クレルなど、分析的なかたちにあたる動詞の語形系列には、～エン形とンのつかない～エー形がみられるが、ここでも～エン形のほうがふつうのようである。むしろ、ここに～エー形がすがたをみせるのは、さきのナレーのばあいと同様、分析的なくみたてとして固定された結果、ヨリふるいかたちがある程度のこりやすかったためとおもわれる。シテ アル相当の分析的なくみたてなど、～エー形がでやすいようである。それでもなお、～エン形のほうがここにもあらわれることに、テ・タリ系語形をもつ方言とのめだつちがいがみとめられる。なお、さきのナレーをはじめ～エー形の終止用法は、まだみてきていない。

～エン形

- ・ナマ アミヌ フレン チャン. いま あめが ふって きた.
- ・ハチガチニエー ムドゥレン シッカム ワカランドー. 八月には かえって くる ようだ.
- ・ワタ ヤメン チ. はらが いたくなって きた.
- ・ティダ イジエン チ. 日が でて きた.
- ・ツトゥナ ノーエン クリリ. つなを なって くれ.
- ・ワンニ ウシエーン クリ. わたしに おしえて くれ.
- ・フン カァ ウチェン クリ. この 子を ぶって くれ.
- ・ウレー ムチェン クリ. これを もって くれ.

～エー形

- ・ジロー フン ニモトウオー ヤーマディ ハタミエー イジエー クリ. 次郎、この にもつを 家まで かついで いって くれ.
- ・カズコヌ ムントウ テイトウムン アッサウバ ハナコエー ホーエー クリリヨー. 和子の ものと おなじ げたを 花子にも かって やれよ.
- ・ダームン トゥレー アンドー. きみの ものを とって あるよ.
- ・セーヤ ヌメー アンドー. さけは のんで あるよ.
- ・トゥーヤ シメー アンドー. 戸は しめて あるよ.

5. 分析的なかたちからの融合形

シツテイル、ミテイルにあたるかたちは奄美語、喜界島方言ではシトル系のかたちがふつうだが、上嘉鉄ではシロン、ミロンのようなかたちがきかれる。これらは、シテ・シタリ系でない分析的なくみたてにくわわる語形のうち、～エン形でなくシレー、ミレーなどのかたちと、ヲリにあたるかたちとのくみあわせが、さらに融合化したものとみられる。

- ・ダー フン イユヌ ナマイエ ワカリヨンニヤ. おまえは このさかなの なまえを しってい
いるか.
- ・シェーヤ サーイエー トウクリッカ ダー シロツカヤ. さけは どうやって つくるか おま
えは しっているだろう.
- ・ハナコー キユカラ ヤマイエー ネインボンドー. 花子は きのうから 病気で ねている.

- ・アミヌ フルン トウキーニュー アネーヤ ヤーエー テレビバツカイ ミロンドー. あめの ふるときには ばあさんは いえで テレビばかり みているよ.
- ・シリウドウイヌ ティントーウバ トゥボーリ. しろい とりが そらを とんでいる.
- ・アン ヤー ディンキ アーローリ. あの いえは 電気が ついている.
- ・ミズ ナガローリ. みずが ながれている.
- ・チー イジローリ. 血が でている.

この方言のノミヲリ、ツクリオリ（九州方言のノミヨル、ツクリヨルなどにあたるつくり）を出発点とするかたちはヌミン、トゥクリンであって、いまみたシトルにあたるかたちとはあきらかにちがう。

これらの融合形で注目されるのは、ここに～ン形と～リ形の対立があらわれることである。この対立は喜界島方言ではふつう、たとえばノミヲリにあたるかたちだとヌミン、ヌミー（ヌミイ）のようなついをなしてあらわれる。上嘉鉄方言でもこの対立はたもたれているはずだが、さきにふれたように、～エン形にはみられないようである。なお、うへのシリウドウイヌ…の例でトゥボーリがでてきているのは、それによってはなしてが文の内容をメノマエの実景としておもいうかべていることのあらわれと説明できる。アーローリ、ナガローリ、イジローリを述語とする文も同様である。

こういう融合形は分析的なくみたて一般でなく、動詞の語形化した分析的なかたちの一部にあらわれるものであろう。

その後喜界島川嶺のことばハンミュミタをきかせてもらう機会をえた。ここにも上嘉鉄とおなじ非テ・タリ系の語形がつかわれている。

6. 川嶺方言の終止的な用法

- ・アリム ガバ ヌメン. かれも たくさん のんだ.
- ・ヒンニヤ ガバ アッペンヤ. みんな たくさん あそんだね.
- ・ワガ ヤジー ナエンドー. わたしが やぎを つないだよ.
- ・タンガ カメンヨ. —アング カメンドー. だれが たべたの. —かれが たべたよ.
- ・ティガミ カチエーン ポストエ イリエンドー. てがみを かいて ポストへ いったよ.
- ・ワガ ジッタ ナギエンドー. わたしが てまりを なげたよ.
- ・ボタンガ トゥリエン、ツキリ. ボタンが とれた. つける.

終止的な用法はここでもテ・タリ系のかたちと共存している。うへの例の～エン形のところもムドゥレンドー／ムドゥタンドー、オエンドー／ナジャンドー、イリエンドー／イリタンドー、ナギエンドー／ナギタンドー、トゥリエン／トゥリティのようにテ・タリ系のかたちもきかれた。その他の文でも事情はかわらないものとみられる。

ただ、例文によっては、つかいわけを指摘するはなしでもあった。たとえば、セー ヌメン ヤーカチ ムドゥレンドー. は外出したひとが（もどって）いう、ワガ ヤジー ナエンドーはつないであることをしめす、…ポストエ イリエンドーはいれてしまったこと、というように。これらから、結果のこりとかパーフェクト的な意味とかが～エン形からとりだされるかは、確認する必要がある。

なお、川嶺での非テ・タリ系の語形が自然にきかれたのは、（分析的なかたちの参加もふくめて）連用的な用法が最初であって、そのときは終止的な用法はテ・タリ系の語形でまかなわれていた。このこと

からみると、～エン系の終止用法は、現在のハンミュミタでは時間表現の形式として、一次的なものとはいえなくなっているかもしれない。上嘉鉄でも調査表の項目をきいていた段階では、終止的な用法はでてこなかったから、事情は同様である。

また、川嶺出身のひとりから、標準語ノンダ、川嶺方言ヌメンにあたるかたちとしてヌメータがでてきた。これは、ノミアリ連用形にタリ系の時間表示形式が接辞づけされている。ヌメン形の過去さしめし性の低下から、さらにタをつけることになったとかんがえられるが、シマ在住のはなしてからはこのかたちはきかれなかった。もっとも、こういうアリ系、タリ系の時間表示の重複した、コンタミネーションの結果のようなかたちが、実際につかわれていてもおかしくないだろう。

7. 中止的な用法

川嶺方言の～エン形も中止的な用法になる。

- ・アンガ ヌメン カメン ネインベン. かれが のんで くって ねた.
- ・セー ヌメン ヤーカチ ムドゥレンドー. さけを のんで いえへ もどったよ.
- ・ネイトウ イジエン ヤッケー ジャッタン. 熱が でて 厄介だった.
- ・マゴーガ ダイガクヌ シケン ウキエン トウータンドー. まごが 大学の 試験を うけて とおったよ.

8. 分析的なくみたて

上嘉鉄とおなじく、～エン形が動詞の分析的な語形にくわわっている例からあげる。

- ・ハー ヌエン ムラタン. 歯を ぬいて もらった.
- ・ムン カメン イキ. めしを くって いけ.
- ・ティダガ アガリン スーイ. 日が のぼって くる.
- ・ティダガ イジエン チャンドー. 日が でて きたよ.

あわせ述語のくみたてに～エン形がつかわれている例もでてきた。

- ・アマイ イジエン カムランナ. そこへ 行って かまわないか.

これも上嘉鉄にみられたが、川嶺でも～エー形が分析的なかたちにあらわれる。

- ・フネイ ヌレー イキヨー. ふねに のって いきなさい.
- ・クルマニエン ヌレー オモーリヨー. くるまに のって いらっしやい.

9. 南琉球語のアリ融合形

奄美語喜界島方言の一部にみられる、これらの～エン、～エー、さらにわかれでた～オーリのようなかたちを他の奄美語、さらに国頭語、沖縄語、あわせて北琉球語にふつうにあらわれるシテ、シタリ系とおなじひとつのものとみとめることはできない。シテ・シタリ形にそなわる t 音（それは標準語とおなじ t, d 以外にも各種のバリエーションとなつてあらわれる）が、～エンほかのかたちからはとりだせないからである。

これらの非テ・タリ系の～エンほかのかたちは、この点で、宮古語ほかからなる南琉球語からとりださなくてはならない。南琉球語にはヌミヤン、トゥリヤンのようなかたちがある。それらは北琉球一般にみられるヌダン、トゥタンのようなかたちとでは無理だとしても、いまみてきた喜界島上嘉鉄、川嶺のヌメン、トゥレンのようなかたちとなら対応をつけることができるからである。

古代日本語には時間表現にかかわる語形のひとつにシタリ（ノミタリ）形があるが、それと同一の内容面をもつセリ（ノメリ）形があることもしられている。タリ系に対してリ系のかたちは、シ・アリ、ノミ・アリに由来するから、シテ・アリを出発点とするシタリとちがって、t音をもたされることはない。南琉球方言にはそれに相当する語形があらわれる。

南琉球語の時間表現ほかにかかわる、動詞非テ・タリ系の一群の語形をめぐっては、それらが古代語のアリ・リ系の動詞語形に対応するという共通理解に、すでに達しているわけではない。そのことは、南琉球方言の時間表現にでてくるアリ・リ系の語形を、アリ・リ系に対立するタリ系の語形を出発点とする変化を想定するみかたさえあったことのなかに、明白にあらわれている。

また、南琉球方言にアリ・リ系の語形が存在することはのべているとしても、その語形の分布をどのくらいのひろがりでもらえているかに関しては、これも統一した見解があるとはみうけられない。テンス、アスペクト的な時間表現にかかわるヌミヤン（のんだ）のような終止形はアリ・リ系とみなしても、ヌミー（のんで）のような中止形がアリ・リ系とすることは保留するみかたがある。その辺の事情を簡単に整理しておく、大体以下のようなになるだろう

まず、ヌミヤン、カキヤンのようなかたちがノミ、カキにあたる連用形にアリがついたかたちを出発点とすることは中本正智 1990『日本列島言語史の研究』（大修館）にのべられている。一方、ヌミーのようなかたちの用法が小論筆者のあげた中止、過去終止、分析的なくみたて（からあわせ述語）におよぶことは名嘉真三成 1982「宮古西原方言の動詞の活用」（『琉球方言と文化』—仲宗根政善先生古希記念論文集刊行委員会）に指摘されている。ただし、名嘉真はこの論文でも、のちの名嘉真 1992『琉球方言の古層』（第一書房）でもこのヌミー、カキーをシテ連用形からの展開とみている。

また、中本 1990 は、ヌミー、カキーの過去終止用法のことはとりあげていないし、名嘉真はヌミヤン、カキヤンのようなかたちについて論じていないようである。しかし、このふたつは「かさねあわせたほうが事実をうつしだすことにちかづくのではないか。」ということとは旧稿でのべたし（松本 2013「奄美喜界島方言の時間表現から—アリ・リ系の形をめぐって—」—『別府大学大学院紀要』15）いまもそうおもっている。

南琉球語のヌミー、カキーのようなかたちが時間表現におなじ過去の意味をになうことができるのは、それがノミアリ、カキアリなたるかたちに発しているからである。一方ではヌミー、カキーはノミアリ、カキアリの外形=表現面での連用形であることにささえられて、連用形としてもはたらくことができる。ヌミー、カキーのかたちははやく仲宗根政善 1961「琉球方言概説」（『方言学講座』4 東京堂）が指摘したように、ヌミー、カキーにさかのぼり、旧連用形ノミ、カキにあたるかたちから発するものではない。

仲宗根 1961 におしえられて、松本 1982「書評と紹介『琉球の言語と文化』（『南島史学』20）はヌミヤン～ヌミー一元説を、およびごしながらさしだした。仲宗根 1961 の指摘するヌミー、カキーのエ段のかたちはノミアリ、カキアリからヌミー、カキーへとかわる中間段階として、ごく自然に想定される語形である。古代日本語でもノミアリ、カキアリからノメリ、カケリが生じていた。喜界島上嘉鉄、川嶺

などにきかれる～エー形も、アリ融合動詞系列のひとつの段階のあらわれとみていい。仲宗根 1961 はこのことを予期・想定していたかのようである。

10. 連用・終止の相関

奄美語をふくめて北琉球語一般のテ・タリ系の語形においては、シタリ形とならんでシテ形も積極的に動詞の時間表現にくわわっている。そして、シタリ形ほかのかたちとともに過去テンスをになう形態論的なメンバーとして、シテ形はあらわれることができる。

たしかに、動詞の語形を文中での基本的な機能にそって区別したとき、シタリ形は終止形、シテ形は（中止）連用形であることはみとめていい。そして、終止的なシテ形は連用形から終止形へと転籍して、シテ連用形と同音形式のシテ終止形となったものといえる。

この種の機能カテゴリーでの一方から他方への転籍は、はじめにふれたように、本土はなしことばのシテ形にもあらわれているし、また、ヨンダリ カイタリのような（ならべたて）連用形も、タリ形の遺物として、出発点的にはタリ終止形につながる。

奄美語にはこのような連用から終止への転籍現象が、標準日本語などよりもおこりやすい土台があるのではないかとおもわれる。それは外形＝表現面においてアリ、ヲウリのようなラ行変格活用動詞が奄美語にそのままのこされたことである。このため、アリ、ヲウリをとりこんだ動詞の語形にも総合的なかたちならヌミュリ、ヌドゥリ、分析的なかたちならヌディ アリのように変格（不規則）性がたもたれることになった。

ここにもみられる～リ形の不規則活用性は、それが連用・終止同形である点である。動詞活用において基本的な終止形、各種の文法的な系列の代表形に、このように連用形と同形の終止形がでてくるとは、奄美語の表現面での連用形が終止形へとわりこむうごきをささえらうごき（のおおきなひとつ）となっているのではないか。本来は連用形のシテ形と同音形式の終止形があるのは、そのことのあらわれとかがえられる。

なお、喜界島方言にあらわれるシアリ形が、南琉球語とつながることから、琉球語地域のリ・タリ系の時間表現形式として、タリ系に先行してリ系が分布していたといえたとすれば、リ系連用形が終止的につかわれることが、さきにあったはずである。それをなぞるかたちで、シテ連用形がタリ系の時代になってから、終止的につかわれるようになった、ということもかがえられる。これだと～テがアスペクト系列～ツとの縁がうすくなっていたとしても、そのこととはかかわりなく時間表現にわりこんでいったとしていいであろう。

11. 終止用法から連用用法へ

ところで、喜界島方言に関して上嘉鉄、川嶺などで～エン系のかたちが終止、連用の両機能にまたがることをみてきたが、ここには、いまうえにのべたことに共通する点と対立する点があるようである。ヌメン、ナガレンのようなかたちが終止・連用ふたつの機能にまたがる点では、うえにみたテ系のヌディ、ナガレティなどとかわりはない。しかし、ヌディ、ナガレティは連用形を出発点としている。テ系とともにヌミュリ、ナガレ（リュ）リなどリ系のかたちも同様である。一方上嘉鉄、川嶺などの～エン系のかたちは、他の奄美語にてらせばヌミュン、ナガレ（リュ）ンなどの、～ン形と同源

とかんがえられる。これらの～ンはさらにさきにふれた～m、～muへとさかのぼるが、リ系のかたち
にこのような m 系の接辞がついたものから変化してきた、きっすいの終止形である。すでにふれたが、
喜界島にあらわれる～エン系のかたちも、もともと終止形だったのが、連用形へと用法をひろげたも
のということになる。

だとすると、奄美語一般にみられる、連用から終止へというひろがりかたに対して、喜界島方言の
～エンでは終止から連用へと用法がひろがったことになる。この終止→連用への変化は奄美語一般に
みられる連用→終止とは逆といわなくてはならない。

しかし、連用→終止にしても終止→連用にしても、そのような機能変化が生ずるのは、連用形と終
止形のかきねが、奄美語では標準語よりひくくしたてられているせいであろう。かきねがひくいとは、
さきにのべた、連用・終止同形のアリ・ヲリ系不規則活用が、表現面でたもたれたことにほかならな
い。ここにみられる連用と終止との相関は、終止・連用間の推移の方向性は反対だが、ともに奄美語
特有の傾向として、統一的にとらえることができる。そしてそれは、表現面でのラ行変格活用の存在
と、そのことの内容面へのあらわれといえる、連用・終止両形の対立面でなく統一面へのコダワリと
いう、奄美語のアルカイックな側面のひとつへとつながる現象である。非終止形と終止形の相互関係
において、非終止形から終止形への転化は、現代日本語の動詞終止形の出自にもみられるように、諸
言語に指摘されるが、逆の終止形から非終止形への転化も、おなじように問題にすることができそう
である。

12. 弱変化・混合変化タイプの活用の動詞の「リ」・アリ形

古典文法では～タリに対して～リは、そのあらわれかたに制限があって、強変化活用タイプからつ
くられても、一・二段活用タイプ（弱変化・混合変化タイプ）の動詞からはつくることできない。と
ころが、喜界島上嘉鉄、川嶺では用例にもでていたとおり、つぎのように～エン形は二段活用タイプ
の動詞からもつくられている。各種の例文ででてきた動詞項目だけを再掲する。

上嘉鉄

ナゲン（なげる）、イリエン（いれる）、イジエン・イジローリ（でる）、ウシエーン（おしえる）、
シメー（しめる）、ナガローリ（ながれる）、ウィーエン（おきる）

川嶺

イリエン（いれる）、ナゲエン（なげる）、サミエン（さめる）、イジエン（でる）、ウキエン（うけ
る）

上嘉鉄方言の二段活用タイプからつくられる～エン形は白田理人ほか 2011『琉球語喜界島上嘉鉄方言
の談話資料』（国立国語研究所「危機方言」研究プロジェクト）からも、ウスッキエン（おさえつける）、
ハタミエン（かつぐくかためる）、ミカキエン（めがける）などがそれとしておぎなわれる。

上二段活用タイプの動詞項目は上嘉鉄のウィーエンだけだったが、奄美語ほかの動詞活用タイプ
の変化にてらせば、そしてそれが～エン形のばあいもなりたっているとすれば、上二段活用タイプは下
二段活用タイプへと吸収される結果、タイプとしては一本化しているから、特にあつめることはない
とおもわれる。

一段活用タイプの動詞項目では上嘉鉄方言にヲリ融合形のミロン（ドー）がでていたが、うえにみ

てきた～エン形にあたるかたちはしらべていない。白田ほか 2011 には、ミローレンのようなかたちがみえるが、これはミロンからの派生形のようなものである。

南琉球語でも二段活用タイプからアリ融合形がつかれるようだが、喜界島方言や南琉球語のこの種のアリ融合形が古層ののこりのなのか innovation の結果なのかが問題になる。テ・タリ形のひろがりがかたちおくれたため、アリ融合形が本来のモチバからひろがったとかがえれば、innovation のほうになる。innovation が生じるには、二段活用タイプ動詞語幹末の母音が四段活用タイプとおなじになっているとか、二段活用タイプがラ行四段活用タイプ化しているとかの条件が必要だろう。

13. 待遇表現にあらわれるシアリ融合類似形

喜界島方言には待遇表現にかかわるヌメー（ン）、カチュー（ン）のような語形が一般にみられる。上嘉鉄、川嶺の待遇表現ではヌメン、カチェンのようなm語尾形がよくきかれる。これはとりあげてきた時間表現をになうかたちと同音形式になる。しかし、待遇表現のほうはヌメー、ヌメンを出発点のかたちとして、ヌメータのみました ヌメーラのみましよう ヌメーティのみまして ヌメーラーのみません などの語形系列をかかえこんでいる。このように、活用体系への位置づけがおおきくちがうせいで、使用のなかでまぎれることはないようである。動詞待遇表現にでてくる～エー、～エン形はていねい系列にあたるが、謙讓性もまだきえきってはいない。

川嶺では全体たずねで、カチンニヤ、ヌミンニヤといえはカクカ、ノムカに、カチェンニヤ ヌメンニヤならカキマスカ、ノミマスカにあたるが、ワンヌ カチェンドーといえは、カキマスカのところに、ワタシガ オカキイタシマスの感じがわずかだぐわわる。もっとも上嘉鉄のはなしてがハクエー クニハー イリエンドーはイリエータンドーとおなじく、めうえにイレマシタヨというとき、ボタンヌ トウリエンドーはあいてに（ていねいに）いうときだというような説明になったのは、時間表現と待遇表現が区別しづらくなっていることのあらわれのようである。

14. 今後の課題から

～エン、～エー形に連体的な用法が、あるいはこのかたちの系列に連体形があるかどうかは、まだききだせないでいる。しかし、連体用法とか連体形の存否は確認する必要がある。タリ系の連体形のことをかんがえると、そうかんがえないわけにはいかない。タリ系のかたちを出発点とする現代日本語の～シタ連体形には、シタ終止形にみられない、トガッタ 鉛筆とかチガッタ ミチのような用法がのこっているからである。その現象を～エン、～エー系へとうつしかえてみると、その連体形があるとしたら、そこには～エン、～エーの終止形にみられない用法があり、それが終止形の用法よりふるいものであるということにならないか。

小論では～エン、～エー形ほかの非タリ系、つまりアリ系のかたちが、一部の北琉球語に残存することをおいかけるだけで精一杯だったため、意味・用法へとわけいることはもちろん、アリ系の語形をできるかぎりとりだして、それを動詞の活用体系のなかに位置づける作業もなされていない。さきあげた浦原方言とともに、これらの点を記録しておくことが必要である。

15. 上嘉鉄、川嶺ユミタの喜界島での特異性（つけたり）

2010年喜界島でシマユミタのことをききにまわったおり、つぎに上嘉鉄にいくとか、ここのまえは上嘉鉄でおしえてもらったという、その集落のはなしてが（小野津、中里）あそこはほかのシマとすこしちがうとかつけてくれた。いまみわたしてきた動詞の語形のつくりなどがちがいの代表的なものとかんがえられる。

また、以前（1979年）やはり喜界島でシマユミタのかたりをきかせもらっていたおり、はなしてであるN氏夫妻のヲットウ夫のほうが突然、トウジ刀自をしかりつけた場にであった。はなしのすじをかるうじておっていた松本にはなんのことかわからなかったが、あとで喜界出身の同席者にたずねたら、刀自が興にのって自分のさとことばをだしてしまったので、ご亭主におこられたのだということだった。この刀自のうまれジマが坂嶺だったのである。具体的にどういふさとことばをくちにしてしまったのか、そのとききいておかなかったが、ここにもうえの動詞の語形がでてきたにちがいない。

シマではこあざごとにおなじものをさししめす単語がちがうこともあるし（喜界島大朝戸）、また、となりの集落でははなしぶりのものまねなどは、よりあいでの余興になったりする（春日正三『方言学講座』東京堂）。単語の個別的なちがいくらなら、ききかえせばすむ。体系的なちがいであってもアクセント程度であればどなりつけられるまではいかないだろう。文法的な語形が体系的にちがってくると、ちがいがみみざわりになって、N氏夫妻間のようなことがおこる、そしてそのレベルのちがいが、川嶺、上嘉鉄ユミタにはそなわっているといえるのではないかというのが、今回感じたことである。

小論は松本2013「奄美喜界島方言の時間表現から—アリ・リ系のかたちをめぐって—」（『別府大学大学院紀要』15）発表ののち、2015年喜界島川嶺方言についてしることでできた内容をおぎない、全体をかきあらためた。そのため、予定していた表題は副題にまわることになった。なお、おもな参考文献は松本2013本文で紹介してあるので再録しなかった。